

山縣悌
三郎著

小學國文讀本

尋常小學校用

二

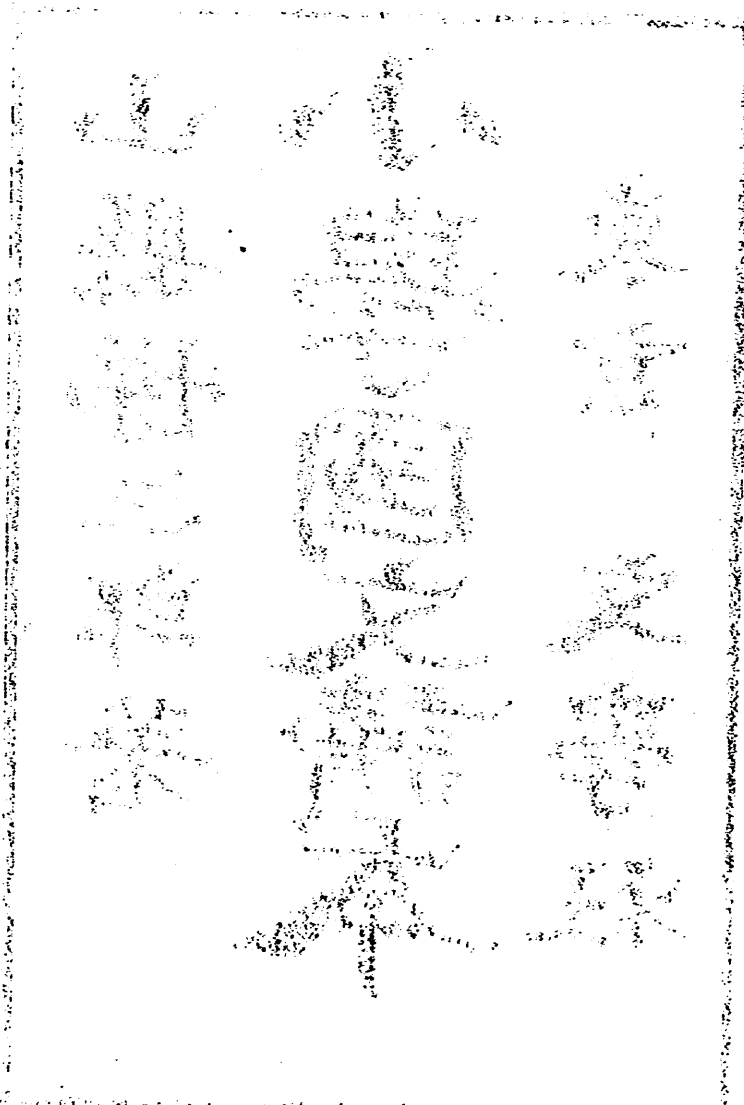
檢定申請本

K120.8
52
2

K120.8

52

2

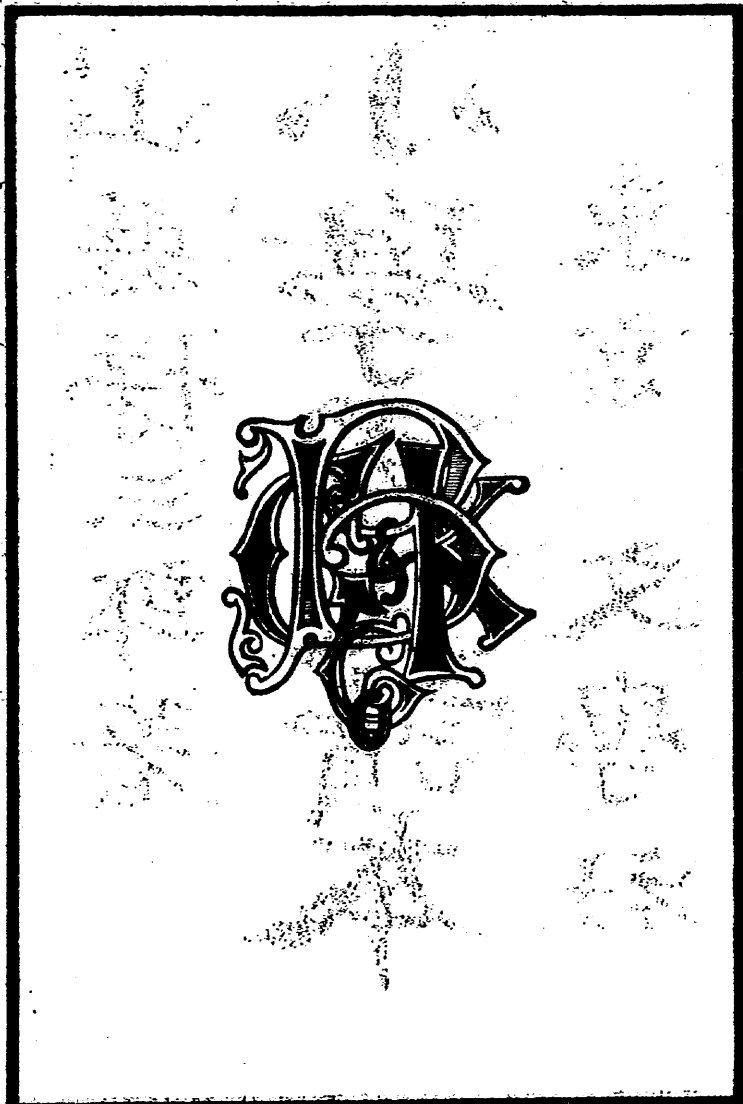


山縣悌三郎著

小學國文讀本

東京 文學社





小學國文讀本卷之二

第一課

このねほきなゑ
は、なにで
あります
か。たこ
であります
す。
むかふ



にみゆるのは、なにで
ありますか。

大きなひと、ちいさい人と
であります。大きな人は、ねや
で、小さい人は、ここでありま
せう。

小さい人の、もちてをるの
は、なにでありますか。

あれは、いともまきで
あります。

大人小

第二課

ねこは、い
ぬに、ねはれ
て、きのう、
へにのぼり、
ました。



犬は、のぼることが、できぬゆゑ、まきのしたに、ほびてゐます。ねこは、まきの上に、せをたかくして、下をにらんでゐります。あのねこは、犬にかまれませんか。
 イエ、ねこはにげませう。

犬上下



第三課

このごどもは、いたにて、小さいふねをつくり、かはにうかべました。
 ふねには、木の江だをたく

さん つみ、またろの上 に、ひのま
 るの はたを たてました。
 はたは、かぜで ひらくと うご
 き、ふねは、うづかに 川の中
 へでて ゆきます。

この川には、うづが ねほくあ
 りまゝで、ふねが うづに あたります。
 ろれゆゑ、こどもは、いま うづを

とりのけて をります。

木川中

第四課

この をんな
 の こは、よ
 く はたらきま
 す。

このこのも



ちてをるものは、なにでありますか。

はい、あります。

このことは、まいにちあさはやく
起きて、いつのうちをはいします。

また、ごぜんをたべてのち、いっ
のうごをはいします。

いまはどこをはいしてをります

か。

トぶんのへやをはいておます。

第五課

あのやまは、なにといふやま
でありますか。

あれは、ふとの山
であります。
大きなたかい山
ではあり
ませぬか。



あの山は、日本一の、大きなたかい山であります。

山 日本

第六課

ひだり みぎ、ひだり
みぎ、ひだり みぎ。

アレ、あちらでも、左 右 左
右 といひます。

あれは、うんどうくわいにゆくのであります。

アレ、むかふから、をんなの子のふみもまゐります。

をんなの子は、うんどうくわいに、なにをいたしますか。

をんなの子

のくみは、ねに

ごごや、めかく

をするので

ごぞうませう。

うんどうくわいは

いさまいいもの

であります、ろー



てからだのくすりになります。

左右子

第七課

あひるといふとりは、よくねよ
ぎます。

いつも川やいけなどに居
ります。

このわりにはわりのやうに

はやくはいること
 はできませんが、
 水の中にて
 は、大ろうはやく
 れよぎます。この
 足を、ごらんなさ
 れ。にはとりとは、
 どこか、ちがひませう。



居水足

第八課

は、さま、このひとは、なにと
 いふひとでありますか。
 ろれは、くすのき、まき、げと、
 ひとであります。
 くすのきと、くすのきは、どのや
 うなひとでありますか。



てんーさまに、よくねつかへまを
し、ちうぎをつく
した、ゑらいひと
であります。

ちうぎをつくー、ゑらいひとにな
て、てんーさまに
は、さま、わたく
ーも、ねほきくなり
て、てんーさまに

りたり、ござります。

第九課

ね竹 さん、ほたるをとりにゆ
きませぬか。

ハイ、まゐりませう。あなたは、うちほ
をねもちなさりましたか。

もちてまゐりました。

アレ、あのやうな、大きなほたる

がきまいた、早く
とりませう。

ほたるこいこい

こがねの

むしよ、

ひかりかくすな

きんぎん

むしよ、



よいほたるではありませぬか。
わたくしは、かごをわすれてまわ
りまいた。あなたのかごに 入れて
くたされ。

竹 早 入

第十課

は、さま、今いくつねるとら
いねんになりますか。



なにゆゑ、その
やうなことを
きます。

一月になる
と、ねもろいか
らであります。

このあひだ、一
月がすぎた

ばかりではありませぬか。またな
かくらいねんにはなりませぬ。
ひとしきは、三十日か、三十
一日づつ、あります。それが十二
た、ねば、らいねんにはなりませぬ。

今月日

第十一課

一月は、とーのはじめゆゑ、七

日 まで は、がくかうも やすみで
あります。

ねはな とお竹 は、はねをつき、
太郎 と二郎 とは、たこを
あげて めます。

ねはな は、はねを、やねの上
につまあげました。

太郎 は、之 をみて、かたへ

の 大きな
木 に のぼり、
はねを とりて
やりました。
その あひだ
に、下 に、
ねきたる たこ



に、犬 が トられて、たこは だいな

ーになりました。

太郎 は、なきだーました。ねはな
とね竹 とは、きのどくがり、ねなき
なきるな 太郎 さん、また かりて
もらうて あげます」といひました。

太郎之

第十二課

よくのふかいいぬがあるとき、

ひときれのにくをくはへて、はー
をわたらうとーました。

ろのかげが、

みづにう、
つりました。

いぬは、

みづにう、
つりたるかげを



みて、ようのいぬが、トぶんのよ
 りも、おほきなにくを、くはへて
 あると、おほひ、ふれをも、うばうて
 やらうと、みづにむかひほねました。
 うのひやうーに、くはへて、あた
 にくを、みづのなかに、おとしま
 した。
 よくばりたるばちで、ひとまされも

ふふ ことが、ならなくなりました。

第十三課

ごらんおされ、一本のからかさ
 大ぜい はひり
 てきました。
 ひとり ふたり
 三人 四人
 居ります。



あの四人は、今がくかりからかへるところであります。

がくかりにあるうちに、雨がふりだしたので、ありません。

あの四人は、きやうだいであります。

あの中に、からかさをもちてゐるのが、大かた一ばんの兄

であります。

私も、あのやうに、多くきやうだいが、ほーうござります。

雨兄私多

第十四課

三郎と四郎と、たこを

こゝらへて居ります。四郎は、大きなかみに日のまるをか

き、三郎は、小刀にて竹をけづり、やがてほねもできました。三郎は、今かみをひろげて、そのうらにほねをはりつけて居ります。



四郎は、糸を手にもち

て、「早くつけやうつけやう」と、せいて居ります。三郎は、「ををつけねばならぬから、おまちよ」といひて、ながいなはをつけ、それからとへでかけました。



三郎は、たこをあげることを

が
こりーやで
あります。風は
あり、つりあひはよし、
みるまにたかくあ
がりました。

刀糸手風

第十五課



「田中さん、あなたは、何を
なさりますか。」

「私は、しやぼんだまをつくりま
す。」

「それは、どろーそ つくるもので
ござりますか。」

「これは、しやぼんをゆにてとき、
ろのしるを、くたのさまにつけ

て、吹くのでござります。

「ごらんをされ、今 つくりませう。」

「イヤア、たまや た

まや。」

たまは、風に

したがひ、ふはりく

とどびゆく。五郎

は、之をとらへ



んとて、両手をあげて、あちら
こちらとねひゆけり。

田 何 吹 雨

第十六課

おちよとねまつと、つれだちてが
くかりゆきます。おちよは、まいあ
さねまつをさうひます。

おちよもねまつも、ねをどきふ



であります。

ふたりとも、が

くもんがすき

で、ほんをよむ

ときは、せんせい

のいひつけの

とほり、こゑを

たかくしてよみます。

す。

ひでをも、またちいさいこであ
 りますが、これもほんをよくよ
 みます。しかし、うちにかつれば、あ
 るぶこともすきであります。

たゞ、きのごくなのは、とらきち
 であります。このこは、いつもあう
 ぶことばかりをかんがつて、すこ

もほんをよみませぬ。

あのやうなこは、ねほきくになりて
も、かーこいひとには なりますまい。

第十七課

これは、太一のこしらへた水
車であります。

木にておくをつくり、はねに
は、うすきいたをもちひきました。

又金次は、
かざぐるまをつ
くりました。

太一の水
車、金次の
かざぐるま、いづれ
もてぎはにで



きました。

めぐれよめぐれ

ひまなくめぐれ、

風吹くまゝに

めぐれよめぐれ、

まはれよまはれ

ひまなくまはれ、

ながるゝまゝに

まはれよまはれ、

車金次 又

第十八課

太郎も次郎も、うまに

のることがすきであります。

あるとき、二人一よにうま

にのりました。太郎は前に

のり、次郎は、うのうするにの

りて、太郎のこゝにつかまります。



した。
 はじめは、しづか
 にあやませました
 が、太郎は早
 くかけさせたく
 なり、一むち、つよく
 あてました。

太郎のむち

が、あまりつよくあたりましたから、
 うまは、きふにはねだし、とぶやう
 にかけました。

二人は、アレヨアレヨとさけび、
 とめやうと一ましたが、うまは
 とまりませぬ。かつりて、二人のこゑ
 に、れどろいて、ますく、かけゆきました。
 了の時、ちやうどむかふから、太

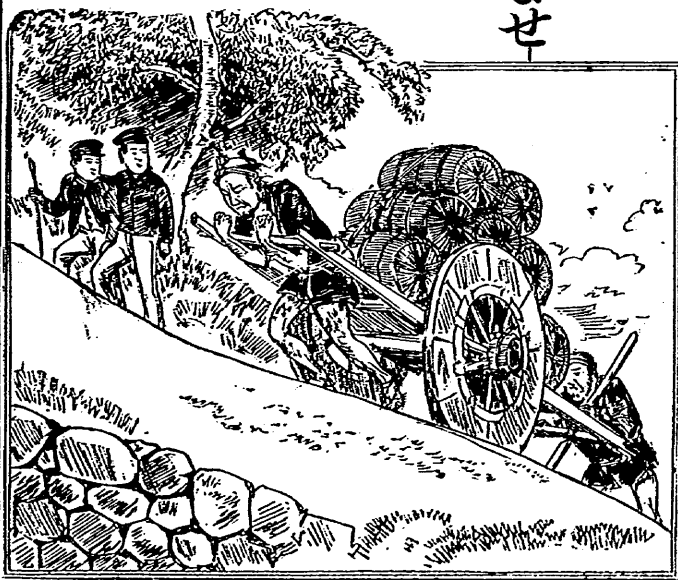
郎の父と、次郎の父と
 が來まゝで、兩手をひろげて
 さつぎりまゝたゆまゝは、やうやく
 とまゝりまゝた。

前時父來

第十九課

あの人を、ごらんなされ、坂に
 車を引まゝあげて居ます。

車につみたるは、なにであり
 ますか。
 米でありますせ
 う。
 あの人は、
 大さうりつかれ、
 たやうにみ
 えます。ーかし、



手をはなしてやすむことがな
りますまい。もうやすまば、車があ
ともどりをいたませう。

それゆゑに、あの人は、休まず
に、あせをながして、引きあげて居
ます。引きあげてから、休むので
ありませう。

かくもんもろのとほり、もう一日

でも 休まば、たちまち あともどり
をいたします。

坂引米休

第二十課

ひでをは、おはなのにんぎやうの
びやうきを、みにゆきまゝた。

「これは、これは、わい、やさま、ごんら
う、おま、で、ござります。」

「どう なさりました、
 どなたが ごびやう
 まで ござります。」

「この ことが、すこ
 ーかぜを ひきま
 して、むづかります
 から、ごらんを ね
 がひます。」



ひでをは、にんぎやうの みやくを
 みて、しばらく かんがつて をりまいた。
 「ナニ、これは、ほんの ちよっとした
 ことで ござります、けつして ごーんぱ
 いには たよびませぬ。あたゝかに
 てねせて たやりなされ。」
 「どうぞ、たぐすりを いたゞきたう、ご
 んどます。」

「イヤ、くすりをあがるにはねよびませぬ、まもなくせんくわいいたませぬ。」

このちいさいねいーやさまは、くすりをもちませぬ。

第二十一課

三郎は、おはなとともにの
に出でたり。

「おはなさん、私は、今きめうなものを見ました。」

「何でありますか。」

「からだは小さけれども、力はつよく、いつもドぶんのいつを、せねうてあるくものであります。」

「わかりませぬ。」

「わかりませぬか。それには、つのが

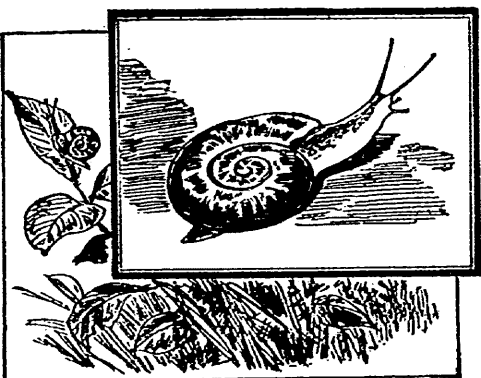
四本 あります。そのうち二本は
ながく、ほかの二本はみどかく、
ながきつものさきに、目がつ
いて 居ります。ものにねるゝと
きは、たちまちいつの中へか
くれます。

「そのやうなものが ありますか。
「まだそれでも わかりませぬか。」

このものは、かわいたところをあ
るくことが できぬ ゆゑ、くさや
木の、雨 またつゆにぬれ居
る時、その上をつたひて、ろろく
たべものをさがしに 出ます。
「まことにふしぎでござります、ま
だ わかりませぬ。」
「それならば、之 をごらんさされ」と

いひながら、三郎は、
かたへのくさむらを
ゆびさしたり。

おはなは、ちかよりて、
うれを見れば、一つ
のかたつぶりなりき。



出見力目

第二十二課

あるさむき日に、大ろうゆき
がふりまいた。四郎と五郎と
にはに、出て、ゆきくさをはじめ
やうといたりました。

うの時、きんぐよの子ごま
ま、七八人あつまりましたゆき、
二つにわかれて、ゆきくさをはじ
めました。

はじめの中は、みなよろこび
 いさみて、あらびたはむれ、なげあひて
 居ました。が、だんく手がつめ
 たくなり、雪をなげることもで
 きなくなりました。

五郎は、いきにて手をあ
 ため、しばらく見て居ますと、
 てきは、之を見て、わきのは

うから、大きな雪のかたまりを、
 五郎のかほへ
 なげつけました。
 五郎は、れど
 ろいてなき出
 ました。
 ところへ五郎
 の母が来て、



「なぜおまへはなまきます、なくくらゐ
 ならば、雪いくさなどをせぬがよい、
 男でありながら、うのやうなよ
 わい ことが ありますか。今につよい
 兵たい となりて、まことのいくさに出
 なければ なりませぬ」といひました。

雪 母 男 兵

小學國文讀本卷之二終

小學國文讀本 尋常小學校用卷二

定價金 一錢

版權所有 明治二十五年五月二十日印刷
 同 二十五年六月二日出版

著作人

山縣 悌三郎

東京府下北豊島郡上駒込村十九番地

小林 義則

東京日本橋區本町四丁目十六番地



發行兼
印刷人

發 兌

文 學 社

東京日本橋區本町四丁目十六番地

